

## 2019イランカラプテ「さっぽろ国体」を振り返る

競技本部長 畠山芳彦

昨年9月の北海道胆振東部地震の発生で第74回国民体育大会冬季大会イランカラプテ（アイヌ語でこんにちは）くしろさっぽろ国体の開催が心配されましたが、札幌市で平成31年2月14日（木）～17日（日）までの4日間で無事に開催されました。

会場は、アルペンがサッポロテイネ、ジャンプ・コンバインドが宮の森白旗山競技場クロスカントリーが白旗山競技場で競技が実施されました。

県選手団の結団式は、札幌アパホテルで行われ、小笠原団長より、「目標は言うまでもなく天皇杯・皇后杯を奪い返すこと。本県選手団にはその力が備わっている。全力を尽くしてさっそうたれ」と激励のお言葉を頂いた。今国体の主将 佐藤太一、旗手 金子未里の両選手。主将の佐藤太一から選手を代表して決意表明「支えて下さる方々への感謝の気持ちと秋田県代表の誇りを持ち、ゴールを切るその瞬間まで力の限り滑り抜く」と力強い宣誓があった。恒例のファイトコールは県体協の高久さんの音頭で「頑張れ頑張れ秋田、ファイトファイト秋田」を全員で力強く声を張り上げ、闘志を奮い立たせた。翌日の開始式では、旗手金子未里が堂々と行進し秋田県の顔として大役を努めあげてくれた。第73回にいがた妙高はね馬国体の反省と悔しさをバネに選手の皆さんはこの一年間厳しく辛い練習に耐え、今ここに県予選を勝ち抜いて県代表として参加された事を思うと胸が熱くなりました。

今国体の展望は、天皇杯・皇后杯を獲得、また、最低でも AKITA 1000点プランのスキー連盟に課せられた130点以上を勝ち取ることであり、ベテラン選手の活躍と若手の踏ん張り、APの向川桜子、生田康宏の実績ある両選手の穴をどう埋めるかがカギであった。ここに、アルペンの奮起を期待した。

アルペンは、インターハイ優勝の森永ののか、石塚 結の活躍を期待したが、森永ののかの5位がやっとであり、大舞台で実力を発揮出来ず残念であった。少年男子は完敗。その中で成年Bの中村和司の準優勝は値千金であり、沼森愛奈も3位と大健闘であった。選手層の薄さが如実に出た。

ジャンプ・コンバインドは、湊祐介の優勝のみであったが、インターハイの不振が嘘のように木村幸大が意地をみせゴールまで大接戦で準優勝と底力を発揮してくれた。また、SJの馬淵源、NCの湯瀬瞬、も頑張ってくれた。各カテゴリーで全て点数を獲得した事は今後大きく飛躍する前兆と確信した。

クロスカントリーは、ベテランの石垣寿美子の存在が大きかった。個人優勝はじめリレー準優勝と全体を牽引してくれた。また、田中聖土の優勝も感動した。田中星那、本田千佳の花輪高校の両名の活躍も素晴らしかった。

ただ、高校最後に引退する田中星那は正直 勿体ない選手である。XCは、満遍なく男女活躍してくれた。しかし、少年男子は力不足を感じる。

結果は、優勝3、準優勝5、3位3、5位6、6位1、7位2、8位2と入賞者数は昨

年と同じ22で総得点は122, 5点(うち参加得点10, 0点)

総合成績は、天皇杯・皇后杯3位と選手一人一人の活躍が輝いたさっぽろ国体、ベテラン選手の活躍が特に際立った。少年男子、大学生男女の競技力の低下、2年後の秋田国体を視野に見据えた時、頂点を狙える選手をいかに育成強化出来るか、今後に大きな課題を残した国体でもあった。

「チーム秋田」のもと、監督、コーチ、ドクター、トレーナーの一致団結の輪で臨んだ国体であり、県体協関係者を中心に各競技会場の熱のこもった応援を頂き選手も奮い立ち、後押しされた事を申し添え、関係された全ての皆様に感謝を申し上げます。

第75回富山国体に向けて、各セッション一丸となって頑張りましょう。